

聖書につまづく勇氣

牧師 山本 護

午後になっても氷点下のその日、このあたりだったかと乱雑な書棚に詩人石原吉郎(1915～77)の著作を探した。石原が長年抑留(1945～53)されたシベリアとは比べようもありませんが、鋭利な空気が外套の上から刺し込む寒さの中で、かつて衝撃を受けた「ペシミストの勇氣」をもう一度丁寧に読みたいと思ったからです。



石原とはラーゲリ(強制収容所)が違い、ぶっきらぼうな対話を少々交わしただけなのに、石原の心的支柱となった鹿野武一。石原は心も行動も徹底してペシミストだった鹿野に人間存在の凄まじさを見た。スターリンの死によって刑期が短くなり、生還できて文学界に地位を得ても、石原には鹿野の影が落ちていたような気がします。

1939年、石原吉郎は神学校へ行くつもりで上京しますが同年に召集され、語学が

堪能なことから1941年ハルピンの特務機関に配属。白系露人工作班だったため1949年「反ソ」行為で重労働25年の判決。石原は帰国後数年経った1957年こう記しています。

「聖書につまづくということは、つまずき得るということは、私たちにつまずきうるほどの情熱、つまずきうるほどの誠実、つまずきうるほどの単純さがあることを意味している。私たちがつまづく個所、抵抗を受ける個所から、聖書の理解が開けるのはその故である。とはいえ自らについては「つまづく希望」を手放したかのように、「[問いかける] 氣力をうしなってからすでに久しい」と自嘲的に述べています。

「わたしはなお待たなければならないのか。／そのためにどんな力があるというのか。／なお忍耐しなければならないのか。／そうすればどんな終りが待っているのか。(ヨブ記6章11節)。「[問いかける] 氣力をうしなってからすでに久しい」という告白に続けて石原はこう記しています。「それは遠くシベリヤの時期、いやもっと前、もっと前……に遡る。そうして、ヨブのあのたくましい問いは、所詮私には神話だったのだ」。

石原吉郎は捨て鉢に言ったわけですが、詩人として「ヨブの神話」のように人間を深くえぐり、ペシミスト鹿野武一の影を負って経済成長に浮かれる世の暗部を不器用に生きた。

「私たちがつまづく個所、抵抗を受ける個所から、聖書の理解が開けるのはその故である。極寒を生き延びた二人のペシミストから、私は聖書にさえつまずき得る勇氣を得た。ペシミストになるどころか「ヨブのたくましい問い」に戻ってかえって力が湧きました。Ω